

農村地域住民向け指導員付き市民農園の実態とその構造 *Actual Situation and Structure of Allotment Gardens with Instructors for Rural Residents*

○鏡 平* 内川 義行**
KAGAMI Taira, UCHIKAWA Yoshiyuki

1. 背景と目的

現在、日本の農村では非農家率が平均9割を超え、都市的生活を営む住民が多い。しかし最近では農的暮らしを見直す風潮が広がり、農村地域住民向けの市民農園は大きな可能性を持つ。市民農園はコミュニティ形成やレクリエーションなど農村生活を豊かにし得る多様な機能を持つと言われるが、実際多くは栽培区画を貸すだけの「作物栽培の場」に留まる。一方で指導員付きの農園も表れ、合崎ら(2004)¹⁾は潜在的利用者が求める要素としてその重要性を述べたが、詳細な実態把握は無い。そこで本研究では「指導員付き市民農園」に絞ってその実態を把握し、実態の構造から見える課題・可能性について検討する。

2. 調査方法と調査対象農園の選定

調査方法は(1)農園担当者からの農園概況に関する資料収集(2)各農園の現地踏査(3)農園担当者へのヒアリングを実施し、分析及び課題の検討をおこなった。調査対象は「農村地域住民向け」「指導員付き」の長野県内の農園とし、農林水産省の「全国市民農園リスト」及び照会先への電話調査により抽出、3農園が適合した(大町市「たかね市民農園」・安曇野市「ハイジの里市民農園」・松本市「内田地区簡易オートキャンプ設備付き農園」)。

3. 調査対象農園の実態

表1に各農園の概況を示した。たかね市民農園は指導員を外部委託し、栽培講習プログラムによって共用圃場を使用した実践的栽培学習が提供される他、農園の草刈や水やり当番など参加者が農園の一部を管理する仕組みで、参加者同士の交流も生まれている。ハイジの里市民農園は安曇野スイス村という多機能施設内に立地し、水利施設以外は同施設を使用、直売所や休憩施設もある他、内部の指導員が栽培講習を実施する。内田地区の農園は250m²の区画(畑:200m²・芝生:50m²)に水道・電気設備が整い、休日は家族でキャンプ・ピクニックができ、農園及び芝生の管理は外部委託業者が行う。

表1. 調査対象農園の概況 *Overview of allotment gardens for research*

	たかね市民農園	ハイジの里市民農園	内田地区簡易オートキャンプ設備付き農園
立地	市街地付近・2カ所	多機能施設内・1カ所	中山間地域・1カ所
農園面積	4,269m ²	1,260m ²	5,326m ²
ハード	区画 83区画(45m ²)	24区画(30m ²)	17区画(250m ²)
区画形態	畑のみ	畑のみ	畑(200m ²)と芝生(50m ²)
施設	共用圃場	購買施設・調理施設	キャンプ設備・共用スペース
ソフト	指導員 外部・種苗店	内部・営農指導員	外部・管理人
運営者	大町市	JAあづみ	松本市
利用者	高齢層	不明	多様な年齢層
料金	3,600円	2,000円	18,000円
プログラム	内容 実践型・多様な内容	相談型・栽培指導のみ	無し
参加者	農園未利用者多い	農園利用者のみ	
体験	内容 農地管理・交流	種苗購入・休憩	ピクニック・キャンプ

*信州大学大学院総合理工学研究科 *Graduate School of Science and Technology, Shinshu University*

**信州大学学術研究院(農学系) *Academic Assembly, Shinshu University* キーワード: 市民農園, 農村生活

4. 実態の構造から見える課題と可能性

各農園における実態の全体構造を図1に示した。たかね市民農園は指導員が実施するプログラムにより体験を提供する他、参加者による農地管理によって運営者の負担を減らす工夫が見られるが、非参加の利用者にとっては区画貸しのための農園と同様な状況である。ハイジの里市民農園は栽培講習プログラムの他、農園外にある隣接施設によって栽培以外の体験が創出され、トイレや駐車場など基礎的インフラを同施設に頼ることで施設投資や運営者業務を抑えている。隣接する調理実習施設は未活用だが、食と栽培を繋ぎ食生活をも豊かにする可能性を持つ。一方、指導内容は利用者が求める無農薬栽培でなく、毎回異なる指導員が実施し継続的な指導ではない。内田地区簡易オートキャンプ設備付き農園は特殊な区画形態（畑＋芝生）によって多様な利用が実現しており、作物栽培以外の「庭」のような機能を有している。共用スペースはあるが活用されておらず、区画内での私的な利用に留まり、利用者同士の交流はない。管理人は指導員の役割も兼任するが、利用者と繋がる仕組みが無いため機能していなかった。

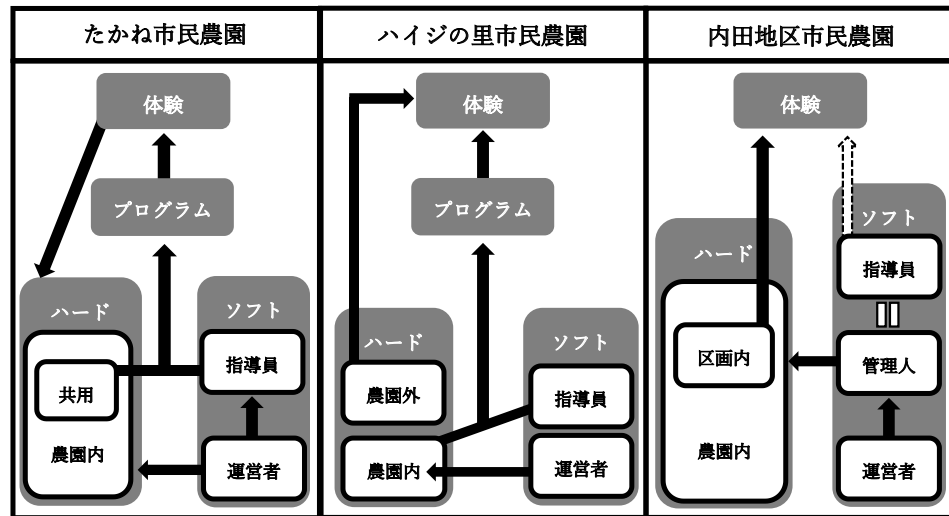


図1. 各農園における実態の全体構造 Overall structures of each allotment gardens

5. まとめと今後の課題

指導員付き農園の実態は農園形態・運営者等の仕組みによって多様であった。その中で指導員は、プログラムの実施により農園内に「公的空間（共用圃場）」を創り人々の交流を促進させ、農園を共同管理する意識定着は地域自治への展開も期待された。一方で環境に配慮した栽培指導へ移行する必要性も示された。また、未活用施設が隣接する農園や区画形態を工夫し「私的空間」を充実させた農園の存在から、栽培指導に限定した指導員のあり方を見直す必要が示唆され、農村生活を豊かにする要素である「食」や「レクリエーション」、さらには近年の気象災害に対応し得る「防災」に関する学びと実践の提供が農園の特性によっては可能であると考えられた。

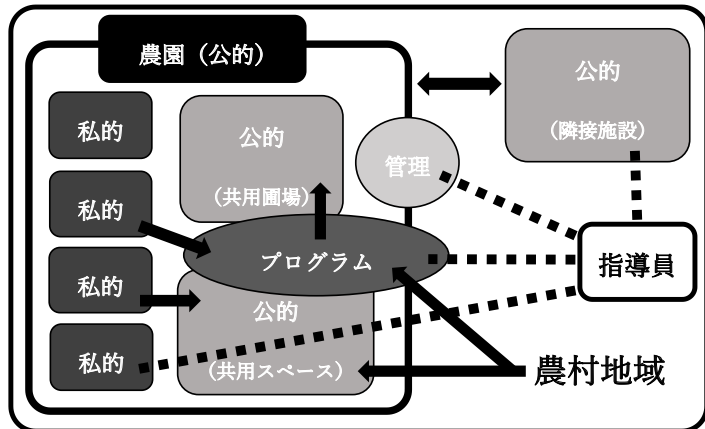


図2. 市民農園の可能性と指導員の位置付け

Possibility of allotment garden and positioning of instructors

【引用文献】1) 合崎英男, 遠藤和子, 八木洋憲 (2004) : 潜在的利用世帯の意向に配慮した市民農園の整備支援, 農業土木学会誌 72(11), p. 933-936